

編 集 後 記

10月6, 7日には和歌山市で楠井教授会長のもとに日本消化器病学会・日本内視鏡学会・日本胃集団検診学会の合同秋季大会が催された。今回は会長の学会のあり方に対する日頃の考えが率直に示され、大変好感がもたれたようである。全部シンポジウム様式が採用され、主題は5つ、その中に「慢性胃炎の問題点」が22の報告によって種々討論された。胃炎像のX線的・内視鏡的解釈、新しい方法(偏光カメラ, 立体顕微鏡)を使つての検討、そして診断の限界、生検、病理組織像との対比の他、成因に関する自律神経、免疫、貧血の役割なども発表された。慢性胃炎の研究は癌、潰瘍に較べると、地味ではあるが、着々と発展しつつあるのは喜ばしい次第である。

本号は前回につづいて慢性胃炎のレ線診断、胃癌との関連性、外科療法、術後胃炎、心身医学的観察など、夫々の権威者によって解説していただいた。なかでも並木正義博士の心身医学的立場から、いわゆる慢性胃炎患者をいかに取扱うべきか、全くお説の通り、共鳴するところが多い。

田中大平博士の老人の上腹部手術に伴う死因分類、合併症など内科医として参考になりました。一層の研究を期待します。

座談会の胃冷凍療法面白く読みました。すでにアメリカでは批判的な意見が強いようであるが、適応と効果を検討した発表をみて、どうもこれが今後普及する性質のものではないように思う。少なくとも自分にやってくれとはいいたくない。

その他技術解説、症例報告、いずれも内容のしっかりしたもの、大変勉強になりました。

本誌もお蔭様で多数の読者に愛されてきていますが、できれば更に読者の多からんことを期待して、本誌を読む機会のない方々にも紹介して下さるよう読者諸先生に願ひする次第です。

<常岡 健二>